

長崎大学における精神・発達障害のある人の生涯学習活動に関する取組

事業名・内容: 障害者の生涯学習活動への地域包括的支援

1. 学校から社会への移行期における学習プログラム(移行プログラム)の開発・実施
2. 生涯の各ライフステージにおける学習プログラム(生涯プログラム)の開発・実施

研究背景:

- ①厚生労働省(2017年):「精神障害者が、地域の一員として安心して自分らしい暮らしをすることができるよう、医療、障害福祉・介護、社会参加(就労)、住まい、地域の助け合い、教育が包括的に確保された地域包括ケアシステムの構築(ピアサポーターの養成を含む)を目指す」
 - ②WHO(2013年):「精神障害のある人を対等な協力者とみなし共にケアに取り組むことを重視し、当事者のリハビリ、ピアサポーターの育成・支援、自殺予防などを推進」
 - ③ピアサポートみなと(2010年長崎県大村市で活動開始、当事者、家族、ボランティア、学生、専門職等が共に語り合う活動):「障害の有無にかかわらず、誰もが悩みを抱える当事者」
 - ④リハビリ・カレッジ(英国で2009年開設、日本では2013年東京に開設):「当事者と専門職等が共同創造(co-production)し、主体的な学びでリハビリを目指す」
- *用語の定義:ピア(peer)は「同じ体験をした仲間」、ピアサポーターは「仲間を支援する障害者当事者」。リハビリ(recovery)は「障害をこえて希望のある人生を生きること」。

連携協議会: 委員21名で4回開催し、効果的な実施体制や連携モデルを構築

- ①ピアサポートみなと5名(発達・精神障害者当事者) **当事者主体の協議会**
- ②長崎発達支援親の会1名
- ③長崎県3名(教育庁特別支援教育課1名、発達障害者支援センター1名、こども・女性・障害者支援センター1名)
- ④長崎労働局1名
- ⑤長崎障害者職業センター1名
- ⑥大村市社会福祉協議会1名
- ⑦コーディネーター1名(NPOのぞみ共同作業所長、作業療法士)
- ⑧技術補佐員4名(長崎大学大学院生、作業療法士)
- ⑨長崎大学教員4名



本事業の基本理念: ①障害者当事者＝障害を体験として知っている人、すでに様々な対処や工夫をしてきて貴重な情報を持っている人、“Expert by Experience(経験のある当事者専門家)”、②ピアサポーターと専門職が共同創造:「教える」→「ともに学ぶ」、「支える」→「ともに生きる」、③様々な気持ちの言語化及び主体的・対話的な学びの推進

1. 移行プログラムの開発:

- ①対象: 発達障害者・精神障害者、その他
- ②目標: 仲間と出会い、自分の特性を知る
- ③内容(案): 月1回計5回、日曜日、13:30-16:30、**毎回ピアサポーターが参加**
初回(ピアサポーターの体験談、リハビリストーリー)、2回(障害の心理教育)、3回(コミュニケーション)、4回(ストレス対処法)、5回(自分の特性を伝える、講座の振り返り、修了式)
- ④特色: **Discovery College**を参考にプログラムを開発



2. 生涯プログラムの開発:

- ①対象: 精神障害者・発達障害者、その他
- ②目標: 夢や希望を持って生きる
- ③内容(案): 月1回計5回、日曜日、13:30-16:30、**毎回ピアサポーターが参加**
初回(ピアサポーターの体験談、リハビリストーリー)、2回(障害の心理教育)、3回(WRAP体験)、4回(恋愛・結婚、当事者研究)、5回(ストレス対処研究、講座の振り返り、修了式)
- ④特色: **Recovery College**を参考にプログラムを開発



- H30年度プログラム受講者の感想(抜粋)
- A氏「仲間の大切さを知り、生きていく勇気が得られた」
- B氏「皆さんから元気を頂いたこと、つながりを結んだことを感謝したい」
- C氏「誰かが語るものが、“それ自分にも”との気づきや安心感に通じることが多かった」
- D氏「皆さんの笑顔で自分が癒されていった」
- E氏「同じ境遇にある人の居場所を作りたいという考えが生まれた自分の人生の大きな分岐点」
- F氏「無理してダメな自分を隠そうとせず、自分らしく生きていこうと気づけた」

目標: 共生社会の実現

Recovery

3. フォーラムの開催: 町や他団体等との共催フォーラム、離島での生涯学習推進フォーラム、成果報告フォーラム

4. 遠隔教育教材の開発: ひきこもりの状態にある人や離島在住の障害者のための教材をピアサポーターと共に開発